

## 由良川・加古川連結通船計画について

### ―西廻り航路の短縮―

川 名 登

### 要 旨

寛文期から發展する西廻り海運は、東北日本と大坂を直結するという画期的意義を持ったが、その航路の長さ、外海の風波による難船の危険等の問題点もあった。この航路を短縮し、内陸水運を利用して安全性を高めようという計画が現われてくるが、その一つに日本海へ流出する由良川と、瀬戸内海に流出する加古川を利用して短縮水運路を創出しようという計画があった。本稿ではこの計画を加古川舟運と由良川舟運の検討を前提として、数度にわたる計画の詳細と、その問題点を明らかにした。

### キーワード

由良川舟運、加古川舟運、西廻り航路短縮計画、日本海・瀬戸内海連結通船路

## 目次

はじめに

一 加古川の舟運

二 由良川の舟運

三 由良川・加古川連結通船計画

I 宝永・正徳期の計画

II 享保五年幕府主導の計画

III 享保六年の計画

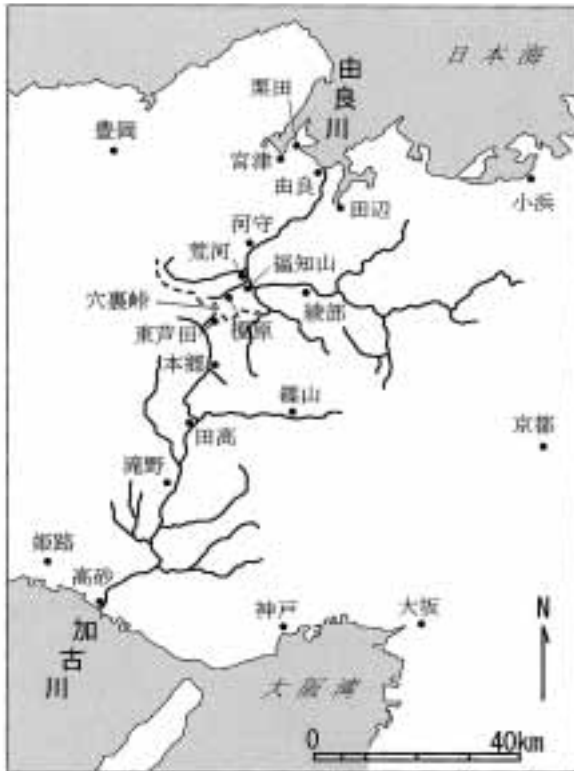
IV 享保・元文期の計画

まとめにかえて

## はじめに

東北地方の米穀や諸品を廻船に積んで日本海沿岸を南下し、関門海峡を越えて瀬戸内海に入り、大坂に到達するという西廻り航路は、寛文十二年の河村瑞賢の航路改良以後盛んとなってくるが、その後この航路を少しでも短縮しようという考えが現われてくる。

その一つが、日本海に向って北流する由良川と、中国山地より南流して瀬戸内海に流出する加古川とを利して、両川の舟運を出来得る限り上流まで開発して結び付け、日本海と瀬戸内海を京・大坂の近くで連結しようという計画である。この計画の現われる背景には、由良川と加古川の舟運の開発があるので、先ず両河川の舟運について簡単に見ておきたい。



由良川・加古川連絡輸送路図

## 一 加古川の舟運

戦国期以前より加古川に渡船のあったことは知られているが、本格的な縦の舟運が開始されるのは、近世に入ってからである。<sup>(2)</sup>文禄年間、当時加古川の川口であった今市村の与兵衛は、下流域の土豪層と思われる磯部村の彦兵衛、垂井村の三郎右衛門と組んで、年貢の船による輸送を考え、瀧野村に住む阿江左兵衛佐の持つ渡船を借りて、薪十荷を積み今市まで乗り下った。この試験航行に成功したのであろう、三人は平田船を造って舟運を開始した。この時の航路はおそらく垂井村より下流、川口までであったと思われる。この間には通船の障害となる岩場等はまだ無かったようで、川船と操船技術を持てば通船は容易であったろう。

この下流部での舟運の盛況を見た上瀧野村の阿江与助は、瀧野より川口までの舟運開設を考えた。しかし、その間には岩礁があつて簡単には通船できなかった。そこで所々の岩の間に舟通しを切り明ける開削工事を実施した。これが後世まで瀧野川<sup>(3)</sup>の水運路開発として人々に記憶されるものとなった。その時期は、後世の由緒書等は文禄三年であつたと記す。これには確證は無いのであるが、おそらく文禄末年頃迄であつたことは確かであろう。この開削工事によって下流への水運路が確保されたので、与助は栗川(揖保川)の高瀬船を買取って廻送している。これが加古川に「高瀬船」が浮んだ最初であつたと思われるが、同時に水運路維持や造船・操船技術も揖保川から導入したことが考えられる。この頃、瀧野に与助を含めて三人の船持が居たというので、少なくとも三艘以上の高瀬船があつて輸送に従事していたと思われる。

しかし、瀧野村の前の加古川には、後に「鬪龍灘」と呼ばれるようになる大きな瀧(岩礁)があつて、これを越えて船を通すことは明治期に至るまで不可能であつた。それ故、瀧野より上流の舟運は別に考えなければならな

った。

慶長九年、上流田高村の土豪層は、田高より瀧野までの舟運開通を計画し、途中の川中にある「津万瀧」・「野村瀧」等幾つかの瀧（岩礁）の開削工事を領主である姫路藩の臣・中村主殿頭に願ひ出て許可を得た。しかし工事を開始してみると予想に反する難工事で、「石切」を雇ひ諸道具を用意し、多くの人足を動員したが、成功は覚束なくなった。これを中村主殿頭に報告したところ、これで不成功では不憫であるので「石切之上手」（高度の技術を持つ石切の集団であろう）を賃してやろうということになり、これを借請けて慶長十一年十月に完成した。しかし、「石切衆」への扶持や諸道具の用意で、多くの出費を負担しなければならなかったという。

これによって田高より瀧野までの水運路は完成し、通船が可能となった。そして田高村の内の川附の芝地に、舟運の拠点としての新田集落が作られた。これが「田高舟町」である。これは明暦三年には家数三千軒余にもなり、住人は殆んど「舟持・加子之者共」であつたという。

また、田高より上流への舟運の開発は、支流柏原川との合流点近くの本郷村まで、本郷川と呼ばれる部分で進められたが、何時完成したかいまだに明らかではない。宝永三年と推定される織田山城守の「覚」<sup>③</sup>に、

「先年、織田上野柏原住居之節、言上仕、取立させ」たといひ、その理由は、「高瀬船取立させ候儀ハ、柏原々京大坂山路ニ而日用之物不自由ニ御座候間、致難儀」すためであつたという。「織田上野」は柏原藩主・上野介信勝であり、これが本郷川舟運を取立てさせたとすれば、寛永十六年以降となり、慶安三年までは「本郷川の御運上」を二貫目ほど納めていたと云うので、本郷川舟運の成立は寛永十六年より慶安三年の間にあつた事は確実であらう。しかし開発主体が誰であつたかは不明である。本郷より荷を積んで下る船は、田高地先に井関があるため、そのま

ま通船できず、田高で荷を積み替えた。そして再び瀧野で積み替えることになる。最上流の本郷にまで至った加古川舟運も、種々の障害により最低二度の船荷積み替を余儀なくされたのである。

田高川水運路が完成した翌年の慶長十二年、姫路藩は田高船持衆に通船の権利を与えると同時に運上金を課した。これが後に「田高川船座」と呼ばれるものの発端である。これに先立つ慶長九年に、下流域で二見村の藤左衛門に運上金上納を条件に大門村より下流の通船権を与えたようであるが、その実体は明らかではない。

元和三年、姫路城に池田氏に代って本多美濃守忠政が入部すると、瀧野村も田高村も本多氏の領地となった。そして四年後の元和七年、本多氏への出入商人で大坂の藏本を勤める橋本浄全等の願出により、瀧野川舟運も田高川舟運と共に「舟扮御運上」場とされた。これは水運を独占し、川船の積荷から運上金等を徴収して領主への上納を請負う、後に「船座」と呼ばれるものである。

この大坂町人橋本浄全等による「船座」請負も三ヶ年間で終り、元和九年三月からは田高川は再び田高村の船持衆代表伝入齊の請負となり、瀧野川は初めて阿江与助の子・瀧野村九郎兵衛の請負となった。

その後、田高・瀧野両船座とも、寛永十一年からは、姫路藩主本多氏の御用商人である江戸の渡部忠八の請負となる。寛永十六年の本多氏移封にともない請負は再び地元にもどるが、田高村はこの時天領となり、船座も寛文年間以後は七年季・十年季等の入札制となり請負人も転々と変った。瀧野村は姫路藩領に残ったが、船座は貞享二年四月から渡部忠八の子孫に当る「普代町人」渡部五郎八の請負となり、宝永元年の本多氏移封まで続いた。その後は上瀧野村の阿江家の請負となり明治二年の船座廃止まで継続した。

加古川舟運の輸送量を反映すると思われる川船の数は、瀧野川舟運開通時には瀧野に数艘であったが、元和元年

の大坂の陣には姫路城主池田氏の命で、摂州神崎川の船橋架橋用として十艘の高瀬船を送っている。この時大坂へ船を送ったのは瀧野ばかりでなく、下流の粟生村でも五艘を送り、上流の田高村でも数艘を送ったという。これらから推測して、当時加古川沿岸に相当数の高瀬船があったことが知られる。また、万治二年には、瀧野より下流の沿岸村々に五十艘もの高瀬船があり、正徳四年には百二艘にもなっている（下表参照）。瀧野・新町村のみの船数の変遷を見ても、元和以後徐々に増加して行き、元禄期に最高となる。元禄八年には上下瀧野村のみでも五十艘をはるかに越えている。その後は減少の傾向にあるが、明治期に入ると再び増加に転じている。

この川船によって送られた荷物は、時代により場所によって多少は異なるが、基本的には天領および諸藩の年貢である米・大豆と商人米で、その他は山方から出る諸産物、木材とその加工品、鉾山産物等であった。例えば安永二年の「覚」を見ると、中流の瀧野村船座を通った「丹州・播州より出候荷物」として、次の如き産物が書上げられている。

一 栗、柿、柏、こんにゃく玉、くるミ、木ノ実

由良川・加古川連結通船計画について 川名

正徳4年 加古川下流域船数表

村 名	高瀬舟数	領 主 名	船1艘1ヶ年運上額
瀧野村	30 艘	榊原式部大夫	米、1石3斗5升
新町村	12	内藤豊前守	免 除
北野村	6	同 上	米、1石2斗
河高村	4	仙石越前守	米、6斗
野 村	3	内藤豊前守	米、1石2斗
大門村	11	八木勘十郎	米、1石2斗
古世(瀬)村	4	稲垣対馬守	銀、30匁
太郎太夫村	10	石原新十郎代官所	免 除
国兼(包)村	4	榊原式部大夫	免 除
芝 村	4	同 上	米、1石3斗5升
里 村	4	同 上	同 上
船頭村	10	同 上	同 上
計	102		

一 ごま、菜種、ゑご、綿実、荒苧、にごき

一 真綿、紙、かご、銅、鉄、いも

一 松茸、しやな、たばこ、茶

一 竹、木、炭、薪、扶香、桧・杉木ノ皮類

一 柴、戸、せうじ、指物、松はい、花はい、油臼

一 長持、たんす、箕、いかき、切竹木之類

これらの他には、他の文書の中に散見されるものとしては、おこし炭、鍛冶炭、つくね芋、黄蓮、青物類、生野の銀荷物等があるが、前掲の産物とほぼ同種類のものではあつた。

これらは殆んどが加古川を下り、高砂湊に着く荷物であつたが、逆に加古川を上る帰り荷は、塩荷が多くを占めていたという。その他は確実な史料がなくて不明であるが、干鰯等の肥料、海産物、日用雜貨等であつたと思われる。

## 二 由良川の舟運

丹波山地に源をもつ由良川は、西流して和知・綾部を通り、福知山を過ぎた所から方向を転じて北流し、河口の由良から日本海に流出する。この川の下流部は勾配が緩く、内海の如くで河口から十五キロ以上も遡つた二ヶ村・



有路村辺まで、海の廻船が入って来たという。正徳四年の「<sup>(4)</sup>覚」であるが、

「式ヶ村々栗田之湊迄四里之間ハ、入海同前之大川故、則北国筋佐渡・越後并丹後近国之渡海船、式百石積三三石積迄之大船共、右式ヶ村迄入津仕候、」

とあって、古くより北国筋の廻船が二ヶ村辺まで入っていた事を記している。

日本海を渡って来た廻船の荷物は、この二ヶ・有路村辺で川船に積み替えられて由良川を遡った。有路村より少し上流の城下町である福知山までは、近世初期には既に水運が開かれていたと思われる。

慶長五年九月、福知山城を囲んで攻めていた細川忠興は、一時居城田辺に帰った。その時、

「福智山より丹後の内中山の城下迄川舟ニ召し、夫より田辺へ壱里計ハ陸路御越被成候」<sup>(5)</sup>

とあって、福知山より中山までは川船に乗って下ったという。これは後の編纂物の記事であって不確かな点もあるが、当時船さえあれば航行は十分に可能であったと思われる。

寛永元年から慶安元年までの間の稲葉氏が城期に作成されたと推定される「丹波福智山城図」<sup>(6)</sup>の中に、城下町の東を流れる由良川の北端に、

「此川下ハ丹後由良ノミなどへ出候也、福知山々 由良迄、八里川舟也」

とある。また明覚寺裏の大川（由良川）と土師川合流点に「船渡し」とあって、ここはまた「丹後ヶノ舟着」とも記されており、この時期には由良湊と福知山の間に恒常的な舟運が成立していたことが推測される。

慶安四年には、福知山の糺屋小兵衛は藩の御用艀を積みに丹後伊根浦まで川船で下っているし、<sup>(7)</sup>寛文七年五月には幕府代官・藤林市兵衛は、福知山城下の蛇ヶ鼻より川船に乗船して河守まで下り、<sup>(8)</sup>翌八年二月にも宮津に向って川船を利用している。<sup>(9)</sup>

寛文九年、福知山藩主松平氏は九州嶋原に転封となり、家中荷物を嶋原に送るため由良舟を雇って由良川を下し、川口の神崎前に停泊する廻船に積み移している。<sup>(10)</sup>藩主および家中の全ての荷物であるので、相当量の輸送であったと思われる。

元禄二年、丹後への旅の途中で、福知山を通った貝原益軒は、

「福知山に着く。山上に城あり。(中略)大河其東北に流る。川舟おほし。是より舟にのりて、丹後の由良に下るといふ。」

と、福知山城下に由良湊まで下る川船が多くあったことを記している。<sup>(11)</sup>

福知山より上流への舟運は、近世初期から船が登ったことはあったであろうが、本格的に始るのは寛永十年、九鬼隆季が二万石で綾部に入封した時からであろう。今知られる記録では享保期であるが、綾部城下町の西方、由良川右岸栗村の河原に小屋を建てて舟場を設け、

「若州廻来、十月<sup>(享保九)</sup>四日夕栗村舟場下芝間ニ小屋を懸、廿五日夕米納所、栗村小畑夕納」<sup>(12)</sup>

と、領内村々の年貢米をここに集め、川船に積んで若狭へ送っている。おそらくこれ以前から綾部藩は同じような方式で年貢米の廻送を行っていたであろう。享保十二年の記録<sup>(13)</sup>では、これ以前から年貢米輸送の船に限らず、多くの「商売船」が綾部城下町近くまで上ってきていた事が知られるが、

「下川筋船着之義、米穀ニ不限惣而商売船、猥着岸前々より御停止ニて、大嶋村ニ波戸場相定り、」

と、綾部城下町の西端・大島村に公的に「波戸場」が設定されたという。これは綾部藩の舟運統制策であるが、この頃多くの商船が綾部附近に着岸していたことは知られる。

これらの事実によって、少なくとも享保期までには、由良川の舟運が綾部附近まで開かれていたことは確かめられよう。

### 三 由良川・加古川連結通航計画

#### I 宝永・正徳期の計画

前述の加古川と由良川の舟運開発を前提として、この両者を結び付けて新しい輸送路を創出し、西廻り航路の欠点を補い輸送時間の短縮と安全性確保を実現しようという計画が、宝永期に現われてくる。

この加古川と由良川を結ぶ発想は、既に寛永〱慶安期に書かれたと思われる絵図の中に見られる。それは「丹波福智山城図」<sup>(14)</sup>で、由良川の支流、土師川の所に、

「此川上ハ、氷上郡本郷々流レ来ル。播磨高砂へもツヽキタル川也」

とあって、由良川から加古川・高砂湊への連続性を意識している。

この発想を引継いで、「丹後宮津領栗田之湊」と「播州高砂之湊」を結び、西廻り航路の「北海西大廻、大坂迄海上凡三百式拾里余之難所を乗申候付、時々破船有之、米穀諸荷物大分海中江捨り、年々人茂損申」という危険を除き「内海・内川纔ニ四拾五里ニ而、自今以後海上破船之無氣遣、日数六日七日ニハ御請合申上、大坂着仕候」<sup>(15)</sup>とい

う計画であつた。その為には、栗田湊より高砂湊まで二十六里あるが、その内二十二里は「先規々川船往来仕候」と既に舟運があるので、残り四里で、その内「丹波氷上郡之内式里半川浚仕、並壹里半陸地路普請仕候得ハ」と、二里半を「川浚」して船を通し、一里半の道を普請して直せば、「丹後宮津領々大坂迄、心安ク着船罷成候」という。この計画を岡村善八が江戸幕府に出願した。最初の出願の時期はまだ明らかでないが、宝永三年六月以前であつたことは確実で、幕府勘定所に呼ばれた岡村善八は、この願の場所は「上方御支配」であるので京都に出願するように云われ、宝永三年六月十八日に京都奉行所に出願している。<sup>(17)</sup>

この出願人である岡村善八とは、どの様な人物であつたか残念ながら明らかでないが、宝永六年の願書には「江戸室町二丁目」と肩書があり、宝永七年の願書には「大坂天満老松町」とある。どちらが本居か明らかでないが、おそらく大坂の商人であつたと思われる。

京都出願より四年後の宝永七年四月二十五日、ようやく京都奉行中根撰津守正包に取上げられて吟味となつたが、「右川筋之内ニ船座有之、伏見建部内匠頭様御支配ニ而候間、早々伏見江相願候得与被仰付」<sup>(20)</sup>と、出願の川筋に「船座」(これは加古川上流の田高船座)があり、伏見奉行の支配下なので伏見に願い出るよう申付けられた。そこで同年五月十三日、伏見奉行・建部内匠頭政宇に出願したところ、「再三御吟味之上、右船座請負人中江対談被仰付」<sup>(21)</sup>たので、当時田高船座の請負人であつた大黒屋・中村源兵衛と九月に対談した。その時の対談書<sup>(22)</sup>が残っているが、それを見ると、先ず最初に宝永六年八月十三日に提出した願書の写を掲げ、これ以外の事は願っていないとし、また船座請所の区間の高瀬船や出荷物等に対してはこれ迄通りで何の妨もしない。こちらは東芦田より本郷まで二里半余の川の「川浚」をして船を通し、東芦田に船会所を置いて荷主及び船頭・水主より「積口銭」を取って、それ

で川普請等水運路の維持を行なう。この区間に船座持の船が入って働くことは自由だが、他船同様に運上銀は受取る。勿論船賃はそちらのものである、という内容となっている。

これで田高船座と合意した岡村善八は、相對證文を取り替わした旨を伏見奉行に届け出た。伏見奉行はこれです「此方支配船座・百姓共三迄、少茂指支無之候、其外給所入組之儀者、京都ニ而御吟味可有之儀ニ候間、勝手次第京都江可參<sup>(23)</sup>」と、こちらは何の差支もないので他領地との関係は京都奉行の管轄なので京都へ行けと指示され、再び京都奉行所へ出願した。同年十一月二十五日再び京都奉行中根撰津守の吟味となり、「絵図・願書・其外書付共」を提出したが、この時の願書が残っており、次の如きものであった。<sup>(24)</sup>

〔岡村 善八江へ指上申候願書ノウツシ〕  
(端裏書)

乍恐口上書ヲ以近道川船往來之義奉願候事

一丹後宮津領栗田之湊々播劬高砂之湊迄、大川廿六里有之、此内廿弐里先規々川舟往來仕候、殘四里丹波水上郡之内式里半川浚仕、並壹里半陸地道普請仕候得ハ、右丹後宮津領々大坂迄心安着船罷成候、近道川船之義數年見立、此度奉願上候事

一右丹後宮津領々北海西大廻り大坂迄、海上凡三百廿里余之難所を乗申候ニ付、時々破損<sup>(船)</sup>有之、米穀諸荷物大分海中へ捨り、年々人茂損シ申候所、右川船往來之義被為仰付被下候得ハ、内海内川纔四拾五里ニ而、自今以後海上破船之無氣遣、日數六日七日ニハ御請合申上、大坂着仕候故、是迄所払ニ罷成候米穀諸荷物、或ハ近国山々ニ捨り有之候雜木、炭薪挽板ニ仕、大坂並京都へ川船ニ積登せ売払申候ニ付、御百姓衆御年貢等之便リニ罷成、其上川筋舟頭水主綱引車力人足、或ハ馬持諸<sup>(商)</sup>売人ニ至迄、大勢之渡世仕、乍恐万民之御救ヲ奉存候事

一 右式里半之川浚場所ニ、川を掘透或ハ古田新田を潰シ申義毛頭無御座候、往古々有来候川筋所々水並を直シ申迄ニ御座候、依之日数卅日にハ慥成家持請人相立、急度川浚川普請可仕候事

一 右壹里半之陸地道普請之場所ニ、山を切り岩を引除或ハ新道を付替申義、曾而無御座候、先規々有来候細道を、牛馬往来罷成様ニ道を広申迄ニ御座候、依之日数四ヶ月ニ是又慥成家持請人相立、急度道普請可仕候事

一 右川筋之内、播州瀧野々丹波本郷迄七里之間ハ、伏見建部内匠頭様御支配、御運上金入札を以拾年切ニ被仰付候高瀬船有之候ニ付、則寅ノ五月十三日内匠頭様へ御願ニ罷出候処、絵図願書之趣委細御吟味之上、右拾年切舟座請負人共江相對仕候様ニ被仰付、則相對仕候処、何之差構も無御座候故、其趣私方へ證文取相済申候事

一 右川筋之内、御公料御給所入組之地ニ而御座候ニ付、則江戸於御上屋敷、御大名様方へ悉書付を以御訴申上候処、絵図願書之趣委細御聞届之上、御国本御役人中へ可被仰遣候之旨、被仰聞候事

一 右川筋御料私領庄屋年寄中へ、幾度も及面談相對申合候処、御田地井堰用水之義、先規々川船往来致来候格式之通運送仕候得ハ、何之指支も無御座候由、被申候事

一 右川筋御料私領入組之御百姓中、先規々持来候高瀬船、且又積来候荷物、私方々一切構不申候、私方へ積申荷物ハ、右四里之所川浚道普請被為仰付被下候得ハ、新規ニ米穀諸荷物大分出申候ニ付、其荷物積口錢助力ヲ以、私共渡世並川浚道普請永代私方々仕、荷物無滞運送可仕候、勿論舟賃駄賃銀之義ハ、前々々在来候割合を以、船頭車力之者共と相對可仕候事

一 乍恐為船御年貢、白銀千枚宛上納仕度候事

但荷物廻り高之積りを以、拾五石積々式拾石積迄高瀬船五百艘、私共手前金を以段々造り立、高瀬船壹艘ニ

付白銀貳枚宛、毎年永代奉指上申度候事

右之趣、被 聞召上御慈悲を以被為 仰付被下候ハ、雖有忝可奉存候、以上

宝永七年寅十一月廿五日

大坂天満老松町

願人 岡村 善八印

御奉行様

この願書を提出したが、その後何の呼出しもなかった。その内、中根撰津守が江戸へ参府し、岡村善八もその後を追って江戸に下って、中根の江戸屋敷に何度も願い出たが、「御支配之外、丹後領入組茂有之候ニ付、早速御吟味難被<sup>(26)</sup>遂」と、支配領域の入組を理由に、吟味が進まなかった。しかし岡村善八はあきらめず、その後も訴え続けたと思われる。

それより四年後の正徳四年、六月十八日と二十七日の両度、幕府勘定所に呼び出され、広縁に召出されて勘定奉行以下立会のもとに吟味を受け、この後は京都代官小堀仁右衛門・大坂代官細田伊左衛門の担当とされた。<sup>(27)</sup> 其の後は両代官に度々召出されて吟味を受けたが、代官よりの示唆があつたのであろう、岡村善八は現地の川筋をなお良く調査したいと願い出、「尤之儀ニ候間、勝手次第川筋罷越、其所之御地頭様方并村々不残書付参候様」と、現地の関係領主及び関係村々全てから了承の書付を取る様にと指示された。勿論その後に、代官も現地調査をするとのことであつた。<sup>(28)</sup>

この時岡村善八が願い出た願書での地元との関係は、従来より川筋にあつて働いて来ている船持の輸送荷物、地

頭へ納める船年貢、川沿村々への用水・堰等、これ迄の状況には何の変化も願わない。私の願が許可となつて新規の荷物が廻るようになれば、その高に依じて「新船・新馬」を調えるが、その船・馬は「船之株・馬之株」として川筋村々に渡し、船賃・駄賃は村々の助成とする。私の「徳用」は新荷物に対する「積口銭」の徴収のみである。この収入で川筋の川浚・道普請等新設輸送路の維持・管理を行うというものであった。<sup>(29)</sup>その後、岡村善八は現地に赴き、種々調査を実施したのであるう、同年十二月二十二日に次の様な詳しい計画書(覚帳)<sup>(30)</sup>を作成して、小堀・細田両代官へ提出した。

(表紙)  
一 丹後

川浚并道普請

丹波 三ヶ国 諸事覚

高瀬船通用

播磨

大坂天満老松町

(岡村善八)

覚

一 北海丹後宮津領栗田之湊々南海播磨高砂之湊まで

廿 壹里ハ先規々川船往来仕候事

貳 拾六里有之此内

壹里余ハ荒川々下榎原迄枝川を浚、舟登せ申度候事

壹里半ハ下榎原々東芦田迄、陸地道普請奉願上候事

貳里半ハ東芦田々本郷迄、川浚川普請奉願上候事

右川筋ニ先規々有来候船持馬持并問屋、且又此度新規ニ相調候新船新馬新船会所、或ハ川浚川普請并陸地道普請致



方之事

丹後栗田之湊

此湊ハ、南西北三方ニ山を請ケ、如何程之難風ニモ此湊ヘ入津仕候得ハ、怪我一切不仕候、勿論大湊故、大船小船数千艘入込候而モ、手支申儀曾而無御座候事

右湊之儀者、諸国之廻船難風之砌日相待仕候より外ハ、荷物捌ケ方無御座候故、此所ニ先規々船之間屋其外支配之者も無御座候、依之私共願相叶候上ハ、此所ニ諸役人指置、御城米或ハ近国諸代名様方御廻米并諸商人荷物、早速私共新船江積<sup>ツマ</sup>写シ、御城米ハ不及申上ル、諸荷物共ニ御急用之節ハ大坂迄日数五日ニハ急度御請合申上、着船可仕候事

附り、右丹後宮津領々北海大廻り乗り候ヘハ、当秋之出来米ハ翌年之五月六月ならでハ大坂着不仕候處、右川船ニ積候ヘハ海上破船之氣遣なく、殊ニ米穀尅粒も無御失墜、日数五日六日ニハ心安ク大坂着仕候事

田辺領

丹後

式ケ村

此式ケ村々栗田之湊迄四里之間ハ、入海同前之大川故、則北国筋佐渡越後并丹後近国之渡海船式百石積三百石積迄之大船共、右式ケ村迄入津仕候、依之諸方々出候荷物并海船川船共に、大庄屋善右衛門支配被致付、兼而右善右衛門与対談仕、何之差構も無御座候事

右式ケ村ニ、諸方々出候米穀諸荷物<sup>積</sup>上ケ場船会所并諸役人指置候小屋を建、御城米并近国御大名様方御廻米諸商人荷物、早速大坂ヘ積登可申候、勿論雨降り或ハ難風之砌ハ土藏ヘ入置、濡くつろき無御座候様ニ可仕候事

此所々東苜田村迄壹里半、細山道ニて是迄牛馬往来無之候所、此度願相叶候上ハ、道普請仕諸方より出候米穀諸荷物牛馬附送り可仕候事

丹波下榎原

船之組頭

右下榎原ニ 馬之組頭 指置候会所小屋を建、諸方々出候米穀諸荷物、早速大坂迄附ケ送可申候事

諸役人

陸地道普請并川浚川普請之事

一 福知山領荒川村々下榎原天照与申所迄、枝川沓里余川さらへ場所

此人足数五百人 但シ日用賃沓人前貳匁五分宛

代銀沓貫貳百五拾目

一 下榎原々東芦田迄沓里半 此内沓里余平地之所道普請

此人足数合三千人 日用賃沓人前ニ  
貳匁五分宛

代銀七貫五百目

一 右 下榎原々  
東芦田迄 沓里半之内<sup>登り</sup>拾八丁山坂道普請

但シ此山坂峯ニ而凡四千坪余切落申候

此人足数合八千人 但シ沓坪ニ付人足貳人懸り  
沓人前ニ一日ニ貳匁五分宛

代銀貳拾貫目

一 右山坂峯々切落シ候土を引、平均道幅を広ケ、山道拾八丁之間ハ一方ニ土手を築立、並木を植、牛馬<sup>登り</sup>下り往来ニ  
危ク無之様ニ道普請可仕候事

但シ此道普請、沓丁ニ付人足百五拾人懸り

此人足数合貳千七百人 但シ日用賃沓人前ニ一日ニ貳匁五分宛

代銀六貫七百五拾匁

一 右 東芦田 式里半川 浚川普請

但シ川筋壹里ニ付人足五百人懸り

此人足数合千貳百五拾人、日用賃壹人前ニ一日貳匁五分ツ、

代銀三貫百貳拾五匁

惣人足数合壹万五千四百五拾人

惣代銀合三拾八貫六百貳拾五匁

又 三貫五百目 川除ヶ粹乱杭并蛇籠竹  
なわむしろ代

又 三貫目 普請道具品々調代

又 五貫目 普請中会所諸事入用

合五拾貫百貳拾五匁

右私共普請ニ取付候其日々五ヶ月ニ急度川浚道普請仕立、諸方々出シ候荷物、片時も無滞運送可仕候事

一 陸地 福知山領下榎原ヶ東芦田迄  
諸方々出候荷物附ヶ越シ 駄賃馬三百疋

右三百疋之内 百七拾疋ハ近在村々ニ先規ヶ有来候  
百三拾疋ハ此度新馬相調申候

但シ下地村々ニ有来候有馬之覺

一 貳拾五疋ハ 福知山町々ニ先規ヶ持来候

一 四疋ハ 半田村ニ 右同断

由良川・加古川連結通船計画について 川名

一四疋ハ 新庄村ニ 右同断

一拾一疋ハ 下榎原村ニ 右同断

一六疋ハ 奥榎原村ニ 右同断

一拾三疋ハ 東芦田村ニ 右同断

一七疋ハ 小谷村ニ 右同断

一拾九疋ハ 香良村ニ 右同断

一拾七疋ハ 伊佐口村ニ 右同断

一貳拾五疋ハ 佐治村ニ 右同断

一六疋ハ 西芦田村ニ 右同断

一九疋ハ 沼村ニ 右同断

一七疋ハ 北御油村ニ 右同断

一八疋ハ 南御油村ニ 右同断

一九疋ハ 井中村ニ 右同断

ノ百七拾疋ハ右之村々ニ先年ノ有来候

残而百三拾疋ハ此度新馬相調申候

右新馬古馬合三百疋之馬ニ而下榎原ノ一里半附越候  
東芦田迄

諸荷物一日ニ兩度宛往来仕候得ハ、馬壹疋登り下り荷物四駄宛附ケ出申候御事

東芦田

此所へ、北国表丹後近国但馬奥丹波所々より附ヶ出シ候御城米御大名様方御廻米諸商人荷物、念入早速大坂へ積登セ可申候事

右東芦田ニ馬之組頭船之組頭諸役人

指置候船會所并小屋を建、諸方ヶ出候米穀諸荷物濡くつろき相改、早速大坂へ積登セ可申候事

本郷

此本郷ヶ瀧野迄七里之間ハ、細田伊左衛門様御支配、御運上金入札を以拾年切ニ被仰付候田高船座高瀬船三拾式艘有之、則伏見建部内匠頭様御支配之節入札被仰付、寅ノ五月ヶ亥ノ五月迄拾年之間、大坂大黒屋源兵衛御請負申上、往来仕候事

但シ右船座三拾式艘之船ハ、元来川筋村々拾六ヶ村御百姓中持来被申候所、小川藤左衛門様御代官所之節被召上、御運上金拾年切ニ入札を以被仰付候、依之船座請負人段々替り申候、初年拾年切ニ大坂千草屋源右衛門請負候へ共、年之間得勤不申、五年勤指上、其後拾年切ニ播磨多可郡塚本新田村永井豊三郎請負、是ハ年之間相勤申候、其後拾年切大坂富川屋善兵衛請負四年相勤、右善兵衛病死致シ指上、其跡を拾年切ニ大坂大黒屋源兵衛只今請負居申候、則寅ノ年ヶ今年迄五年相勤来候御事

右本郷ニ先規ヶ船會所土藏有之候、私共新船ハ東芦田ヶ瀧野迄川筋九里半之間直通シ仕候故、諸役人指置候小屋建不申候事

瀧野

此瀧野迄本郷ヶ積出シ候荷物之間屋先規ヶ有之、川西瀧野問屋へ六分上ヶ来候、則瀧野ハ東新町之間屋へ四分

問屋名代之御運上として、白銀六拾五枚宛、御地頭榊原式部太夫様へ毎年指上ケ被申候事  
右瀧野ニ而、諸方々積出シ候荷物持越シ、船々積替申候、依之船之組頭役并ニ指置候船会所并小屋を建、御城  
荷物持越シ候人足頭

米或ハ御大名様方御廻米諸商人荷物共ニ濡くつろき相改、早速大坂へ積登セ可申候事

一 右瀧野々高砂之湊迄七里、此川筋村々御百姓中先規々持来被申候高瀬船有高、且又銘々御地頭様指上被申候船運  
上米之事

一 船頭村ニ高瀬船拾艘 先規々持来候

右ハ御地頭榊原式部太夫様へ、御運上米船壹艘ニ付一ヶ年ニ米壹石三斗五升宛、指上被申候事

一 芝村ニ 同四艘 右同断

右御同人様へ御運上米同断

一 里村 同四艘 右同断

右御同人様へ御運上米同断

一 国兼村 同四艘 右同断

右御同人様御知行所 此村ハ船之座本之由ニ而御免  
御運上米

一 瀧野村 同三拾艘 右同断

右御同人様江御運上米同断

一 大門村 同十壹艘 右同断

右者八木勘十郎様江御運上米、船壹艘ニ付米壹石貳斗つゝ、指上被申候事

一古世村 同四艘 右同断

右者稲垣対馬様へ御運上銀三拾匁ツ、指上ケ被申候事

一太良大夫村 同拾艘 右同断

右者石原新十郎様御代官所御運上米、先年々由緒有之由ニ而、御運上御免

一野村 同三艘 右同断

右者内藤豊前守様へ御運上米、船壹艘ニ付壹ヶ年ニ米壹石式斗ツ、指上ケ被申候事

一北野村 同六艘 右同断

右御同人様へ御運上米同断

一新町 同拾式艘 右同断

右御同人様御知行所御運上米、由緒有之由ニ而御運上米御免

一河高村 同四艘 右同断

右者仙石越前守様御運上米、船壹艘ニ付壹ヶ年ニ米六斗ツ、指上被申候事

メ百拾式<sup>(ママ)</sup>艘也

右之船持、銘々之村江出候荷物外ハ隣り村を限り積申儀罷成不申候、依之船賃懸り物等も、銘々勝手能様ニ相究メ往来致来候故、本郷々高砂迄川筋十四里之間之船賃并所々ニ而持越候積場上ケ場之間屋口錢懸り物、高直ニ相見へ申候間、私共新船ハ少々下直ニ相究、諸方荷主勝手ニ罷成候様ニ可仕候事

一乍恐此度新船之為船御年貢、白銀千枚ツ、毎年永代奉指上ケ申度旨、願書本紙書記最前奉指上ケ候事

但、高瀬船壹艘ニ付白銀貳枚ツ、之積を以、新船五百艘造り立申度奉願候、尤私願之通ニ被為 仰付被下候其年之内ニ新船百艘造り立候ハ、白銀貳百枚、又ハ五百艘出来揃候ハ、其年之内ニ白銀千枚御上納仕度候、勿論諸人手廻シ能米穀諸荷物大分出、新船不足仕候ハ、造り増シ奉願上度候、菟角船之造り高ニ応シ銀高御上納仕度候事

右御運上金、船壹艘ニ付白銀貳枚ツ、奉指上ケ度と奉願上候趣旨ハ、右書記候通り先規々川筋ニ御百性中持来候高瀬船、壹艘ニ付米壹石三斗五升又ハ壹石貳斗、或ハ銀三十拾匁ツ、銘々其所々之御地頭様へ御運上指上ケ来り被申候ニ付、其甲乙を平均先格之積りを以、此度新船御運上銀も船壹艘ニ付白銀貳枚ツ、指上申度旨奉願上候事

一 右川筋所々ニ井関用水場有之候所、此儀ハ毎年五月中旬々七月下旬迄日数凡七十五日余之間ハ、前々々川筋ニ持来候船持も、先規々堅ク船通路相止メ来り被申候、依之私共新船之儀も、先格之通りニ相止メ候故、縦井関用水場何ケ所御座候而も構無御座候事

一 此度奉願上候新船五百艘、川筋其所々ニ而船通用仕候船数場所之覺

百 艘

丹後宮津領栗田之湊より、丹波福知山領下榎原迄川筋八里之間、貳拾石積々廿石積迄之川船造り立、往来可仕候事

貳百五十拾艘

丹波東芦田々播磨瀧野迄川筋九里半之間ニ、拾五石積々廿石積迄之高瀬船造り立、往来可仕候事

百五十拾艘

右瀧野々高砂迄川筋七里之間、廿石積之高瀬船造り立、往来可仕候事

ノ 五百艘也



右川筋所々ニ荷物持越、船々積替へ場有之候ニ付、其所々ニ応シ船数増減仕候事

高砂  
此湊ハ往古々之船付ニ而御座候故、大船小船共ニ諸方々入込申候、則此所ニ船会所并諸役人小屋を建、御城米或ハ諸方々出候荷物濡くつろき相改、則渡海船へ積渡シ、早速大坂へ積登セ可

申候事

仕候事  
右高砂々大坂迄内海拾九里有之、則朝之地風卯刻ニ高砂を乗出シ候へハ、大坂へ其日之晚七ツ前後ニハ心安ク入津

大坂

濱洲船着能場所兼而見立置候間、此所船会所  
諸役人指置候居所を建、北国筋丹後近国但馬丹波所々々出候諸荷物川船ニ出シ、大坂へ着船仕候節御城米濡くつろき鼠喰諸事相改御藏ニ詰、御支配之御役人中様方へ俵高相渡シ可申候、勿論諸荷物雨降り或ハ火難為用心之、土藏何ヶ所も建置、諸方より荷物入津次第直ニ蔵入可仕候事

右書面之通ニ御座候、乍恐御吟味之上私願之通被為 仰付被下候ハ、不寄何叟川筋一件之儀者御役人中様迄幾度も御伺申上、御下知奉請度候、以上

大坂天満老松町

正徳四年午十二月廿二日

岡村善八判

小堀仁右衛門様

細田伊左衛門様

この「覚帳」を見ると、日本海に面した丹後国栗田湊より播州高砂湊を経由して大坂までの、詳細な計画を知ることができる。

この「覚帳」を受取った小堀・細田両代官は、翌正徳五年四月、これに「願書」・「絵図」の二点を添えて次の如き至急廻状<sup>(31)</sup>を丹後・丹波・播磨三ヶ国の川添村々に廻し、この計画に対する差障りの有無を書付にして、来る六月晦日迄に京都最寄の村は小堀仁右衛門、大坂最寄は細田伊左衛門へ提出する様に命じている。

今度大坂天満岡村善八与申者、丹後宮津領栗田之湊々丹波川通りを經、播磨高砂湊迄川船往來仕度由、於江戸御勘定奉行中迄願出候ニ付、右川筋村々差支有無之儀我等共可遂吟味旨、江戸々被仰下候、則願人々指出候絵図・願書之写シ覚帳共三通り相廻之候

一右川通りニ願人方々新規ニ川船五百艘段々ニ造り立致往來、公儀江御運上銀指上、勝手能所ニハ船会所小屋等建之、肝煎之者共差置度由、尤從先規有來候通船并井関有之所々ハ、其船方又ハ百姓与致相對、埒明候様ニ願人申候、弥其通ニ候哉、ケ様之所々障無之哉之事

一丹波下榎原村之東々福地川筋へ流れ出候山川筋を、荒川村領々下榎原村迄之間壹里余之所、川を浚小船引登せ、且又下榎原村々東芦田村之南ニ有之川筋へ取続候迄之間ニ、有來平地山道壹里半程之所、荷附之牛馬往來候様ニ道幅を広ケ、普請致度由相願候事

一東芦田村領々本郷村迄、川筋貳里半程之所、川を浚川船通用致度旨申候事

右善八願場所之儀、御料私領大分之人組ニ而候間、川浚道普請船通用之儀、彼者指出候絵図願書覚帳之趣考合、於村々遂吟味、善八願立通被仰付候而者指障有之哉否之儀委細書付、來ル六月晦日迄、京都最寄ハ仁右衛門、大坂最寄ハ伊左衛門方へ可被差出、其趣ヲ以江戸へ可相同候、此絵図書ものとも四通り急順々相達、廻状村書之下ニ刻付庄屋

致印判、留り之村々可返之候、以上

(正徳五)  
未ノ 四月

細田伊左衛門

小堀仁右衛門

丹後々丹波播磨迄

村々

この廻状は、加古川中流の播磨国瀧野村へ五月十五日の未ノ下刻に少し上流の板波村より到来し、下流の河高村へ送っている。<sup>(32)</sup>この後瀧野村の船座九郎兵衛及び船持は、六月二十七日に「断書」、<sup>(33)</sup>二十八日に「口上書」<sup>(34)</sup>を代官細田伊左衛門へ提出した。対岸の新町村でも同月に「断書」<sup>(35)</sup>を提出している。これら「断書」等の中では、これ迄の船座や川船輸送の状況を述べ、これに差障ることが無ければ原則的に何の差支えもないとしながらも、在来の荷物と新規荷物とが混同されることを懸念している。しかしこの段階ではまだ岡村善八は瀧野村等を訪れていない。

一方、昨正徳四年に岡村善八が廻ったと思われる由良川筋では、田辺領由良湊より夏間村迄の川筋村々の内、大川村より桑飼上村までの七ヶ村が六月に「口上書」<sup>(36)</sup>を提出した。ここでは多数の船が上下することによって、船曳道を広げ竹木を伐採すること、船引人足に雇われ耕作の妨になること、鮭簗等漁業に支障があること、船会所や荷物蔵を建てる空地がないこと等をあげて、村に支障があることを述べている。

しかし、この廻状を見ても「断書」や「口上書」等を期限までに提出しなかった村も多かったようで、七月には再び廻状が廻され、差支がなければその旨を、差障りがあればその理由を詳しく記し、岡村善八と相談したかどうかも記して、七月二十日迄と期限を切って提出する様に命ぜられている。<sup>(37)</sup>これに応じて加古川中流の上・下曾我井、河合中、新部村等でも「断書」<sup>(38)</sup>を提出した。

その後の同年九月に、岡村善八は加古川流域の村々を廻って交渉したらしく、九月十六日には加古川中流の垂水村・貝原村の船持・庄屋との間で相對證文を取替わしている。<sup>(39)</sup> の中で岡村はこれ迄の川船輸送を一切妨げず、田畑作物等を踏荒すこともしないと約束している。次いで九月十八日には瀧野村の船座・船持との間でも相對證文を取替<sup>(40)</sup>し、唯今までの船積みの諸荷物をはじめ、船賃・乗賃等何によらず「有来り候古法」を破らないとした上で、丹波・丹後・但馬・播磨の国々から出る一切の諸荷物を瀧野村まで輸送することには何の構もなく、瀧野村から高砂湊までは右四ヶ国の諸荷物は全て瀧野船座へ渡し、岡村善八の新船は「北国筋荷物」のみを積むということで交渉が成立している。

また同じ加古川中流の新材、河合中、上・下曾我井村の四ヶ村との間でも相對證文が書かれ、<sup>(41)</sup> 川除、川堤等を破損しないこと、梁・瀬張等の漁業を妨げたら保障すること、井堰の設置に反対しないこと等を条件に、「指構申義茂無御座」と村々は通船計画を承認している。そして翌十月には、それぞれの村で取替した相對證文の写を断書も添えて小堀・細田両代官の許に送っている。<sup>(42)</sup>

両代官は、江戸勘定奉行より「川筋村々差間有無」を吟味するように命ぜられているので、これらの證文等を取りまとめて、江戸奉行所へ送ったものと思われる。しかしその後は、何の結論も出ぬままに、時日が過ぎていった。

後の文書では「埒明不申候而、打捨有之」<sup>(43)</sup>とこの出願は放置されていたという。そしてこの近廻通船計画が再び脚光を浴びるのは、これから六年後の享保五年であつた。

## Ⅱ 享保五年幕府主導の計画

幕府は正徳二年八月、「西国・中国・北国筋より江戸・大坂へ相納候御城米運漕之船、近年は破船多、御失墜之事二候」という城米輸送体制の難船多発による崩壊の危機感をもって、船足の寸尺、乗組員の数、廻船改め等々を細かく定めた劃期的な海運法令を發布する。<sup>(44)</sup>この動きは、廻船に対する安全対策の規定のみでなく、安全航路の検討にまでも及んできて、西廻り航路の航路短縮と安全性を求めた岡村善八の「近廻り通船計画」が再び浮上する。

幕府は享保五年、岡村計画の現地見分を代官・飯塚孫次郎に命じた。この指令は、「此度我々川筋見分之儀、北国筋御城米西海大廻りにて大分破舟有之、御損米御座候ニ付、両川筋見分被仰付候」<sup>(45)</sup>とあるように、幕府城米輸送の安全性を確保する為の河川航路開発を目的とするものであった。

飯塚孫次郎は十二月十九日に宮津に赴いたが、川筋村々との交渉は主に手代の野村時右衛門、小林平六が担当し、「大坂川師三四人附添参候由」<sup>(46)</sup>とあるように、岡村善八とその手代達も随行したと思われる。

野村・小林一行は、十二月二十一日由良泊り、二十二日には北有路村泊りであったことが知られるので、由良川筋村々を上流に向って見分していったのであろう。その後、峠を越えて加古川筋に入り、田高船町に至っている。

船町には、丹波篠山川と本郷川の合流地点に大きな井堰があり、これは「古来船筏共通シ不申候井堰」であったので、本郷川を下ってくる船は、ここで荷物を積み替えなければならなかった。それによって田高船町は繁栄していたのである。この井堰は、単に沿岸村々の用水確保の為のものではなく、船町にとっては生命線であった。そこでこの度の見分でも、井堰の由緒来歴を長々と書いて訴えたが認められず、<sup>(48)</sup>「御城米廻船」が通るのであるから一定期間堰を開くよう、それが、「御上意」だと云われ、一通り断を申上げたが受入れられず、「左様二候ハ、江

戸へ罷越候様ニと御意被成候故」「無是非、何之構も無御座との手形」を書いて提出したという。<sup>(49)</sup> この手形は、おそらく代官側が各村々に雛形として示した次の様なものであったと思われる。

證文之事<sup>(50)</sup>

一北国筋御 城米廻船通路之儀ニ付、今度丹州栗田湊々播州高砂浦迄、御見分被成候處、当村之内田畑井堰等も指障候儀も有之哉と御吟味御座候、当所之義前々々川水引来候ニ付、有来候井堰養水ニ相障申義無御座候得者、指支申義無御座候、依之村々井堰之場所書付、指上申候通相違無御座候、尤前々九月々三月迄者川舟往来仕来申候間、外ニ指支申義一切無御座候、為後日證文仍而如件

享保五年子十二月 日

何国何郡何村

野村時右衛門様

小林 平六様

しかし、この證文を提出しても、船町ではなお諦めきれず、翌年の四月には、船筏の堰通行は何としても迷惑千萬であるという嘆願書を書いている。<sup>(51)</sup>

川筋見分の野村・小林一行は、十二月二十五日の晩に加古川中流の瀧野村に着いたという。この瀧野村の河中には、後に「閼龍灘」と呼ばれるようになる岩場「大滝」があつて、上下の船筏はここを通行できず、上下の荷物は全てここでは積み替えられていた。これによつて瀧野村と対岸の新町村は潤っていたのである。<sup>(52)</sup> しかし今度の計画では、この「大滝」も「切ならし、直通りニ可被仰付」と、岩場を開削して船の直通が出来るようにするというのである。これを聞いた瀧野村の船座九郎兵衛と船持達は、文禄年中先祖以来の「御運上場」（船座）の由緒、船役

等について申上げ、「直通ニ罷成候時ハ、丹波丹後但馬米穀も紛、直通ニ罷成」、「御運上相破レ候様ニ罷成」と、直通りになつては運上場の特権が破綻すると訴えた。<sup>(53)</sup>しかし代官側は、この度我々が廻村しているのは、「大廻り之損失米大分之儀故、愈々此川筋通舟之儀、遂吟味候様ニ」との命令を受けてのことと、「善ハ此度召連候得とも、是ハ数年川案内存候者之儀ニて、召連候へ共、全以善ハ願之儀ニ而ハ無之」と、岡村善八を随行させているがそれは川筋案内の爲であつて、岡村善八の願に依るものではないとして、今度の計画が幕府の意志に依るものであることを明確にしている。それ故、「大滝」の直通路開削工事も、「御入用を以可被仰付候、又ハ誰ニても入用ニ無構可致哉、其段於江戸表御沙汰可有之」と、幕府直営で行なうか請負で実施するかは幕府が決定することである。「大分之御城米損失無之様ニ罷成候へハ、縦御運上所之障リニ成候とても、御構ハ有間敷」と、城米の損失が無くなるのならば、たとえ運上所の支障になつたとしても構わない。「古来々御運上所ニ可有之候へ共、大分之御城米之損失ニハ御替被成間敷候」といい、どうしても反対するのなら、現在姫路藩領である瀧野村を知行替して天領にしても実行する、江戸で姫路藩主である榊原式部大輔に申上げて「達而御構可被成儀とも不存候」と藩主も反対しないだろうとまで申し渡された。それでもなお船座由緒等の覚書を差上げたいと申上げたので、「左様ニも存候ハ、如何様共仕候へ」と云われて、ようやく由緒等の書付を提出することができたが、同時に「北国御城米御通船之儀ニ付、瀧荷物持越之場所、御普請被仰付候義ニ付、指障リ無御座」と、「大瀧」の開削通船普請に支障は無いという證文を書かさ<sup>(54)</sup>れ、運上銀・舟役米等についての書付も提出した。

十二月二十五日には、瀧野村より少し下流の新部村よりも同村井堰に関する「覚」<sup>(55)</sup>が提出されたが、問題にもされなかつた様で、翌二十六日には、上曾我井・下曾我井・河合中村の三ヶ村と共に代官側が示した雛形通りの何の

支障も無いという證文<sup>(56)</sup>を提出している。おそらく川筋の多くの村々が、同じような證文を提出したものと思われる。

このようにして、幕府代官による由良川・加古川筋村々の見分は進められた。そこには、安全な「御城米内川廻シ」輸送路の創出という幕府の強硬な意志がみられた。そして、曲りなりにも地元村々の同意書を取りまとめることが出来たと思われるが、その後は何の動きも無かった。

### Ⅲ 享保六年の計画

翌享保六年九月、またまた「川筋御見分」の噂があり、瀧野村大庄屋九郎兵衛は、その真否を内密に田高村庄屋に問合せた。<sup>(57)</sup>その答では、当年八月初め京都に出て代官増井弥五左衛門に伺ったところ、川筋見分の命は受けてはいるが、いつ実施するか今江戸に問合せ中であるとのことであつたという。

それより二ヶ月後、この見分は十一月に開始された。それは、岡村善八に加えて江戸町人・川崎屋勘助よりの出願があつたからである。京都代官・増井弥五左衛門は十一月五日に、次のような先触<sup>(58)</sup>を村々に出した。

覚

一今度丹後国栗田湊々播州高砂浦迄川舟通船之儀ニ付、願人岡村善八、川崎屋勘助相願候ニ付、此度我等見分被仰



付、今晚福知山泊、明六日より段々川筋遂見分、明後七日宮津泊り、夫より順々其村々川通り遂見分候、右見分ニ付相尋儀有之候間、最寄く之泊り休へ庄屋年寄并ニ組頭申合せ、何茂印判持参可罷出候

一 右御用ニ付罷越候道筋、泊り休之旅宿有来之外少ニても繕普請掃除等之義、堅ク無之様ニ可申付候、勿論泊り休共ニ木錢相払、手前賄にて罷通候間、何ニても用意致間舗候、尤其所々之役人中被罷出候事、堅ク無用ニ被致候様ニ、末々へ可申達候

一 船路之外陸地罷通候節ハ、人足左之通ニ候間、無滞可差出候

一 乗物人足 四人

一 駕籠人足 九人

一 歩持人足 十人

ベ 廿三人

右之通りニ而人足賃錢相払罷通候、已上

(享保六)

丑 十一月五日 増井弥五左衛門

荒川村

岩井村

(以下略)

これをみると、増井弥五左衛門は十一月五日に京都を出立し、福知山に一泊して翌六日より見分を開始し、七日には丹後宮津に泊っている。宮津では、この輸送計画で栗田湊を「常湊」とすることへの支障の有無を問い、宮津

村名主より「何ノ構モ無御座」という證文を取っている。<sup>(59)</sup>この時の見分には、代官手代伊藤清次兵衛、加藤軍平次、棚橋彦右衛門の三名のみでなく、江戸願人・川崎屋勘助、岡村善八の手代・市右衛門も同行していた。<sup>(60)</sup>

翌八日から由良川に沿って村々の見分が進められ、荒河村から支流和久川に入って下榎原村に一泊、それより丹波加古川筋を下って十一日には瀧野村に着いている。

今度の川崎屋勘助が加った通船計画が、どのようなものであったか詳細は不明であるが、最初の岡村善八の計画とは少し異なるものであったようである。瀧野村附近では、少し上流の多可郡下戸田村の川瀬から本流とは別に新川を開削して、瀧野村の「大瀧」を迂回しようという計画もふくまれていたようである。

これを知った瀧野村船座と船持は、これでは「新川江水引揚ケ、本川筋渴水仕」と、本流の水量が減って通船が困難となる、特に下戸田村から瀧野村の間には「野村瀧」など岩場の難所が多く、少しでも渴水となれば船の往来が不能となり、瀧野村へ荷が着かなくなる。その上、これ迄下がつて来ていた丹波、丹後等の国々より出る諸荷物が、新川を抜けるようになり、「滝野村御運上所相破レ」と瀧野村の船座機構が崩壊すると訴えている。<sup>(61)</sup>

また、代官増井の手代から、北国筋米穀が通るようになると、これ迄の丹波丹後但馬産出の米穀との区別をどうするか、諸荷物が多く通行すると運賃は下落するか、米一石の運賃は何程か、荷物積替の瀧の所の広さは何程か等々について質問されている。<sup>(62)</sup>

そして最後には、正徳五年に岡村善八と取替した證文の写を提出し、これと同じ条件ならば何の支障も無いという證文<sup>(63)</sup>を出している。

瀧野村より少し下流の新部村と、上曾我井、下曾我井、河合中村の三ヶ村も、正徳五年七月に小堀・細田両代官

に差出した證文の写を提出し、十一日にはこの四ヶ村から正徳五年九月に岡村善八と取替した證文の写を提出している。<sup>(67)</sup> 恐らくこれと同じ条件であるならば、何の支障も無いと答えたのであろう。

このようにして、代官増井弥五左衛門の由良川、加古川筋村々の見分は終ったと思われる。しかし、その後は何の動きもなく、またしても結論が出なかったようである。

#### IV 享保、元文期の計画

代官増井弥五左衛門の見分があつてから十一年後の享保十七年、またまた「近廻し通船」の願が出された。<sup>(68)</sup> 今度は岡村善八は村上長右衛門と組んでおり、計画も一部変更したようである。『稚狹考』<sup>(69)</sup> には、「北国の船を由良に來らしめ、ゆらより川舟にうつし、福知山、くろゑ、成松をへて、津の国へ出るへき事、声言して関東に願ふものあり」とあるように、今度の通船路コースは福地山を過ぎたところから由良川の支流、土師川そして竹田川に入つて廻り、黒井、成松を経て加古川に入るものであつたようである。

この出願に対応した現地見分は、元文元年に久美浜代官・海上弥兵衛に命ぜられた。海上弥兵衛はこの年十一月に見分を開始し、十一月二日には由良川の松原寺に一泊、翌三日の昼食は由良川を廻つた桑飼村の寺（莊嚴寺カ）でとり、河守の隣りの波美村に泊っている。<sup>(70)</sup> これより由良川筋を上つたと思われ、六日には加古川中流の瀧野村に着いた。<sup>(71)</sup>

瀧野村では、船座、船持より正徳五年九月十八日付の岡村善八との相對證文書を差出している。<sup>(72)</sup> また同じ六日に、瀧野村より少し下流の垂水村、貝原村でも正徳五年九月十六日付の岡村善八の出した相對證文書を提出している。<sup>(73)</sup> 両者ともこの證文の条件と変わらなければ何の支障も無いと述べたのであろう。

次いで上曾我井、下曾我井、川合中、新辺の四ヶ村も、正徳五年九月に岡村善八と取替した相對證文の写を提出し、「右證文之通ニ御座候へハ、少も相障儀無御座候」という一札を差出している。<sup>(74)</sup>

そして翌十一月七日には、代官海上弥兵衛一行は瀧野村より川船で高砂湊に下って行った。これによつて、海上弥兵衛の沿岸村々見分は終つたであろうが、その後はついに結論が出なかつたようである。

#### まとめにかえて

こうして、由良川と加古川の舟運を連結し、日本海と瀬戸内海を結ぶ「近廻し通船」の輸送路計画は、幾度となく出願と見分が繰り返されながら、ついに幕府の許可が下らなかつたと思われる。

そこにはどのような大きな障害が横たわつていたのか、書き残された文書が残存していないので明らかではない。しかし、出願と見分の過程を見る限りでも、幾つかの問題が読みとれる。一つは沿岸村々の農業用水、特に通船とは相入れ難い井堰の存在があり、河中に立てられる築、網等の漁業権の問題がある。また各河川に成立している部分的な通船の特権、船座、船持の権域との調整があり、陸路の部分では道巾拡張にともなう田畑潰地の問題、要

所々に設置する藏、倉庫敷地の問題等がある。もしこの計画が実現し、大量の物資輸送が始まると、それを運ぶ川船や車馬の調達は可能でも、その乗組員、船頭、水主等大量の労働力の短期間での確保は困難であつたろう。それらの問題を一つ一つ村々との間の相対で解決していったのであろうが、それでも沿岸村々の暗々の抵抗は消すことが出来なかつたのではなからうか。

それまでも岡村善八は、この通船計画を諦めなかつた。後には川崎屋勘助や村上長右衛門と組んで、計画を一部変更しながらも出願を繰り返した。はじめて岡村善八がこの計画を出願した宝永三年以前から、既に三十九年が経過している。元文元年には岡村善八は相当な年令に達していたものと思われる。恐らく彼は、その一生の大部分をこの通船の夢に賭けたのではなからうか。

明治期に入ってからであるが、瀧野村の大瀧（鬨龍灘）の通船路開削に成功した村上清次郎は、加古川と由良川の連結を考え、明治五年に加古川上流の本郷より石生、黒井へと水路を掘り抜き、竹田川、由良川への通船を計画している。<sup>(75)</sup>しかし、これも実現はしなかつた。そして昭和六年には衆議院議員石原善三郎外二名は、第五十九回帝国議会に、加古川と由良川を利用して裏日本と表日本を結ぶ運河開鑿を建議している。<sup>(76)</sup>岡村善八の見た通船の夢は、現代にまで生き続けているのである。

註

- (1) 「羽柴秀吉判物」(小野市・山田家文書)。
- (2) 近世初期からの加古川舟運開発及び瀧野船座・田高船座等については、拙稿「播州加古川の舟運開発」(『千葉経済論叢』第三十三号)参照。なお史料の註等も前稿に譲って省略する。
- (3) (宝永三年)四月「覚」(『竹橋余筆』巻六)。
- (4) 「丹後丹波播磨三ヶ国川浚并道普請高瀬船通用諸事覚」(南部家文書・舞鶴市郷土資料館藏)。
- (5) 『綿考輯録』巻十七 第二卷、三七九頁。
- (6) 「丹波福智山城図」(『日本古城絵図の内』)、国立国会図書館藏。
- (7) 「福地山支略」(『福地山市史』史料編三、二九八頁)。
- (8) 「福知山藩日記」(『福知山市史』史料編一、二四五頁)。
- (9) 「福知山藩日記」(『福知山市史』史料編一、二九五頁)。
- (10) 「福知山藩日記」(『福知山市史』史料編一、四二〇～四二二頁)。
- (11) 貝原篤信著「諸州めぐり、西北紀行、卷之上」(『益軒全集』卷之七、八六頁)。
- (12) 「役所日記抜書」(『綾部市史』史料編、一六二頁)。
- (13) 「役所日記抜書」(『綾部市史』史料編、一七四頁)。
- (14) 註(6)に同じ。
- (15) 宝永七年十一月二十五日「乍恐口上書を以近道川船往来之儀奉願候事」(南部家文書、舞鶴市郷土資料館藏)。
- (16) 註(15)に同じ。
- (17) 午(正徳四)八月「口上」(瀧野町・阿江家文書)。

- (18) 宝永六年八月十三日「乍恐口上書ヲ以奉願上候」(瀧野町・阿江家文書。  
 (19) 註(15)に同じ。  
 (20) 註(17)に同じ。  
 (21) 註(17)に同じ。  
 (22) 宝永七年九月「乍恐口上書ヲ以奉願上候」(瀧野町・阿江家文書。  
 (23) 註(17)に同じ。  
 (24) 註(17)に同じ。  
 (25) 瀧野町・阿江家文書。  
 (26) 註(17)に同じ。  
 (27) 註(17)に同じ。  
 (28) 註(17)に同じ。  
 (29) 註(17)に同じ。  
 (30) 南部家文書(舞鶴市郷土資料館蔵)。  
 (31) 瀧野村・阿江家文書。  
 (32) 註(31)文書の「付紙」。  
 (33) 正徳五年六月「乍恐御断奉申上候御事」(瀧野町・阿江家文書)。  
 (34) 正徳五年六月「乍恐追而指上申口上書之覚」(註(33)文書の内)。  
 (35) 正徳五年六月「乍恐御断申上候覚」(瀧野町・阿江家文書)。  
 (36) 正徳五年六月「乍恐口上之覚」(南部家文書・舞鶴市郷土資料館蔵)。

- (37) 未（正徳五）七月「廻状」（瀧野町・阿江家文書）。
- (38) 正徳五年七月「乍恐御断奉申上候御事」（阿江家文書）。
- (39) 正徳五年九月十六日「一札之事」『社町史』第四卷・資料編二、五五九頁。
- (40) 正徳五年九月十八日「仕リ申證文之事」（阿江家文書）。
- (41) 正徳五年九月「仕リ申證文之事」（阿江家文書）。
- (42) 正徳五年十月「乍恐指上ヶ申口上之覚」（阿江家文書）。
- (43) 子（享保五）極月二十六日「覚」（阿江家文書）。
- (44) 『御触書寛保集成』四十二、廻船并川船等之部、一一四六頁。
- (45) 註(43)に同じ。
- (46) 「宮津日記」（『丹後史料叢書』四、二一九頁）。
- (47) 「瀧洞歴世誌」（『大江町誌』史料編、一二四頁）。
- (48) 享保六年四月「乍恐以書付御断申上候」（田高区有文書『兵庫県史』史料編近世四、三七二頁）。
- (49) 丑（享保六）九月十九日「多可郡田高村江去年川筋御見分之節申上候趣内證聞合ニ遣申候口上之覚」（阿江家文書）。
- (50) 瀧野町・阿江家文書。
- (51) 註(48)に同じ。
- (52) かつて柳沢忠氏は「阿江与助の真の目的は何か」という論考（『季刊河』十八号）の中で、与助は瀧野村の前の岩盤岩礁を意識的に開削しなかつたと述べられたが、与助の意図であつたかは別としても、結果的にはこれが瀧野村と新町村の繁栄につながつた事は事実であらう。
- (53) 註(43)に同じ。



- (54) 註(43)に同じ。
- (55) 享保五年十二月二十五日「覚」(阿江家文書)。
- (56) 享保五年極月二十六日「證文之事」(阿江家文書)。
- (57) 註(49)に同じ。
- (58) 瀧野町・阿江家文書。
- (59) 享保六年十一月七日「差上申證文之事」(「宮津日記」・「丹後史料叢書」四)。
- (60) 註(59)に同じ。
- (61) 丑(享保六)十一月五日「覚」(阿江家文書)。
- (62) 註(61)文書および享保六年十一月十一日「乍恐言上仕口上之覚」(阿江家文書)。
- (63) 享保六年十一月十一日「乍恐言上仕口上之覚」および同日付「乍恐言上仕口上之覚」(阿江家文書)。
- (64) 享保六年十一月十二日「差上ケ申一札之事」、年不詳「書上申候扣」等(阿江家文書)。
- (65) 丑(享保六)十一月十一日「差上ケ申證文之事」(阿江家文書)。
- (66) 享保六年十一月「乍恐御断申上候事」、同年同月「乍恐御断奉申上候御事」(阿江家文書)。
- (67) 享保六年十一月十一日「仕申證文之事」(「小野市史」第五卷・資料編Ⅱ、六六九頁)。
- (68) 「雅狹考」第六(「小浜市史」第一卷・史料編、一九七頁)。
- (69) 註(68)に同じ。
- (70) 「滝ヶ洞歴世誌」(「大江町誌」史料編、一二九頁)。
- (71) 元文元年十一月九日「御断之覚」(阿江家文書)。
- (72) 元文元年十一月六日「仕申證文之事」(阿江家文書)。

(73) 元文元年十一月「一札之事」〔『社町史』第四卷、史料編二、五五九頁〕。

(74) 元文元年十一月六日「差上申一札之事」〔阿江家文書〕。

(75) 〔『西協市史』本編、六七〇頁〕。

(76) 〔第五十九回帝国議会、衆議院議事摘要〕下卷（国立国会図書館蔵）。

付記 本稿作成にあたっては、小野市コミュニティ館長・石野茂三氏、小野市立好古館・粕谷修一氏、および

舞鶴市郷土資料館に多大の御助力をいただいた。記して感謝の意を表したい。

（かわな のぼる 本学名誉教授）